

六甲カトリック教会 教会報

2024

9

No. 633



すべてのいのちを守る月間

主任司祭 英 隆一朗, s. j.

9月はすべてのいのちを守る月間として、いのちのことを考え、祈り、行動する月です。教皇フランシスコの来日（2019年秋）を受け、日本の教会が取り組むべき特別の課題として司教団によって定められました。大阪高松大司教区では、この期間、特別献金を行っています。日本の司教団は、『見よ、それはきわめてよかった—総合的なエコロジーへの招き』を発表し、9月14日（土）には、サクラファミリアにて、出版記念シンポジウムが開かれます。

教皇の来日以降、エコロジー的危機がひしひしと迫っているのを痛感します。その直後にあった、コロナウイルス感染症の蔓延による自粛生活を初めとして、夏の異常な暑さと豪雨災害の頻発化などです。また、世界平和も著しく脅かされてきました。ウクライナの戦争、イスラエルとパレスチナとの軍事衝突など収束する気配が見られません。日本では安倍元首相の暗殺事件もあり、世の中が悪い方向に向かっているように見えます。

このような時にこそ、エコロジーと平和を願って、すべてのいのちを守るために私たちに何ができるかを問い直してみましよう。『見よ、それはきわめてよかった』や『回勅ラウダート・シ』を読んでみましよう。

難しさは何かというと、あまりに大きな問題で、自分たちができることにあまりに限りがあることです。例えば、この酷暑ではエアコンを使うしかなく、多くのエネルギーを消費せざるをえないです。化石燃料を燃やすにしても、原発のエネルギーを使うにしても、環境悪化を止められないです。また、プラスチックが環境汚染・海洋汚染の元になっているのは分かっていますが、現在の生活はプラスチックで溢れていて、それなしで生活することが難しいです。スーパーマーケットで売られているものはほとんどすべてプラスチック包装されていて、プラスチックを買わない選択肢はほとんどないのが現状です。

大きな危機を考えると、ただただ無力感に苛まれてしまいますが、そんな中でもできるだけのことを行ってみましよう。例えば、この月間に、大自然のいのちが守られるように特別な祈りをささげてみる。生活をより質素にするために、小さな工夫を試みる。新しいモノを買わないように、すでにあるものを活用する。単なる娯楽や刺激（嗜好品・刺激物・テレビやネットなど）を1ヶ月間控えて、心が穏やかになれる生活を実施してみる。就寝時刻を早くして、節電してみるとか。何か小さな工夫を考えるだけで楽しいかもしれません。質素な生活は心に余裕が生まれ、自然と調和する生き方を見いだしやすいです。

このようなことは、四旬節で行うようなことですが、自然を守るエコロジーの観点から、自分の生活を見直し、ほんの小さなところから平和を築く工夫をするのは、この月間にふさわしい貢献だと思います。

8月25日「シノドスの集い」報告

8月25日、小教区評議会主催「シノドスの集い」がイグナチオホールで開催され、50余名の参加者に進行係（ファシリテーター）8名が加わり、約2時間にわたる会合となりました。

無作為に分けられた5～6名のグループが8つのテーブルに分かれて着席し、それぞれのグループには進行係が一人ずつ配置されます。

最初に英神父様からお話がありました。『六甲教会は典礼奉仕や社会活動など教会内外の活動に関わる様々なグループが活動する「グループでの役割を持つ教会」であり、また地区会を通して個々の信徒や信徒のグループが交流する「共同体の交わりの教会」として機能してきた。ただ信徒の高齢化やコロナに伴い、今では維持できなくなった活動もあり、地区会も以前のように機能しなくなっている。そのため今後六甲共同体はどのような形の「共に歩む教会」を目指すべきなのか、まずは「自分が教会に望むこと、したいこと」を皆で祈り考えましょう』、とのご提案でした。

「シノドスの集い」が単なる会議や分かち合いと異なるのは、沈黙と祈り→グループの一人一人が発言→沈黙と祈り→最初に出たグループ内の意見をもとに再度各自が発言→沈黙と祈り→グループ全体としての気づきのまとめ→各グループの気づきを参加者全員で確認、という手順で進行していくことです。

8つのグループが出した最終的な気づきの中で、いずれのグループも共通して求めているのは「居場所としての教会」でした。「ほっとできる場所」、「集まる場」、「究極のコミュニティ」、「属する場所」など表現は様々ですが、誰もがミサ以外にもつながりの場を求めていることがわかりました。ただその実現のためには若い人、新しい人にどのように参加してもらうか、どんな交流の場をどのように維持していくか、教会に来られない人が参加するためには何ができるか、など今後の課題も見えてきました。

どなたも予想以上に積極的に発言され、初めて言葉を交わす方とも意見交換ができました。初回ということもあり、時間配分が難しく、どのグループも慌ただしくまとめに入る羽目になってしまいましたが、今後も継続的に「シノドスの集い」を開催してほしい、と大多数の方が希望されたのが大きな収穫でした。今後このような機会を重ねることが課題ひとつひとつの解決に繋がるよう、聖霊の導きを願いたいと思います。

小教区評議会副議長 荏原いずみ

『 森 晃太郎神父の初ミサと、神学生ニティンさんの六甲教会“里帰り” 』



8月25日（日）は、昨年9月に叙階された森晃太郎新司祭の初ミサでした。森神父はその日の二つの朗読と福音書から、私たちが「主に仕えているか」「互いに仕えあっているか」「イエスから離れていないか」と問いかけられました。現代人はあまりにも忙しくて、神との関係性、人との関係性に妨げがあると指摘されました。ごミサのあとに予定された「シノドスの集い」に出席する信徒のために、この3つの問いかけを心にとめて、神や人との関係性をよりよいものに変えていくように、とされました。そして、神の働きを分かち合えるようにと、お説教のなかで話されました。



その前日24日（土）には、3年前に神学生として六甲教会で7カ月間を過ごした神学生ニティンさんが久しぶりに元気な姿を見せてくれました。9月4日までの京都での黙想会に参加するために来られ、神戸にも立ち寄ってくれたのです。ニティンさんは教会の集いのひとつ「ミドルの会」のためにカレーを作り、子供たちには英語を教え、26日に笑顔で去って行きました。日本語、とってもうまくまりました。そして、おなかが、ちょっぴり出ていました。



====11月10日バザーでの個人出店者募集====

教会行事の見直しにより、身の丈に合った教会行事を目指し、2024年度のバザーでは、個人またはグループでの小さなお店の参加者を募集します。

手作りお菓子やアクセサリ、手工芸品、雑貨など、皆さまの特技、家に眠る自慢の作品やお宝を、ご自分で出店し、売り上げは材料費を除いて教会または個人及びグループの支援団体へご寄付ください。飲食に関する出店や、ワークショップ（木工やアクセサリ作り等30分程度で完結するもの）なども歓迎します。

出店スタッフは教会内外を問いません。但し、教会からの連絡等もあり、責任者は六甲教会信徒の方がお立ち下さい。また10月20日に行われるバザー委員会（11:30～）にご出席いただき、出店についての説明をお聞きください。

応募は出店申込書に必要事項を書き入れ、教会受付にご提出ください。締め切りは9月末日です。不明な点がありましたら、バザー企画グループ・荏原（i-ebara@kcc.zaq.ne.jp）または藤井(090-8367-4988)まで、お気軽にお問い合わせください。

同時に、地区役員を中心に用意する飲食コーナーのスタッフや、バザー全体の準備を行うスタッフを募集します。出店はできないけれども教会活動に協力したいと思われる方の応募をお待ちしています。教会受付に「個人ヘルパー申込書」を用意しました。氏名・連絡先・参加時間帯を記入の上、ご提出ください。

新しい形での教会行事となります。皆様のご協力を得て、作り上げていきたいと存じます。どうぞよろしく願いいたします。

2024年度バザー企画グループ

堤 福生・荏原いずみ・井川 直哉・藤井 敦子

《 ミニコンサート「聖母の被昇天に寄せて」 》



8月15日（木）は聖母の被昇天の祝日でした。ミサは7時と10時の2回行われましたが、10時のミサのあと、「聖母の被昇天に寄せて」と題したミニコンサートが続き、ミサとコンサートが一体化したかのようなひとときが生まれました。演奏はソプラノ安保恵美（あぼ・えみ）さん（写真左から二人目）。ドイツで活躍されている教会音楽家です。ちょうど故国日本に里帰りされた合間を縫って歌って下さいました。曲目は、アヴェ・マリアを中心とした数曲。おなじみのものから現代作曲家の作品まで幅広く歌われました。最後はシルクのような繊細な声で、モーツァルトの「アヴェ・ヴェルム・コルプス」で締めくくられて喝采を浴びていました。オルガン伴奏と演奏は当教会オルガン奉仕者の野村友佳さん、清水真理子さん、松井公子さんの3人。猛暑日にもかかわらず多数の聴衆が来られ、短い時間でしたが聖母の被昇天の祝日にふさわしい時間を共有しました。安保さんは所属がプロテスタント教会なのでマリア賛歌を歌う機会がない、今日は六甲教会で心おきなく歌えたと、ご挨拶のなかでおっしゃっていました。



2024 平和を祈る集い

『ルワンダ大虐殺から 30 年～義足を作り続けて～』 8 月 11 日



ルワンダ共和国は赤色で示した国。(→)

宣教・養成部は 2024 年平和旬間の講演会に、ルワンダで義足の製作とその無償提供を 27 年間にわたって続けているルダシングワ真美氏と夫君のガテラ氏をお招きした。講演は真美氏とガテラ氏が交互にマイクをとり、ガテラ氏のスワヒリ語は真美氏が通訳した。

ルワンダ共和国はアフリカ大陸の内陸にある人口約 1,400 万人の国で、面積は四国と大阪・京都を合わせた広さ。赤道直下であっても日本の平地よりはるかに標高が高いため、気温はより低いという。

真美氏は「ぜひ、ルワンダに避暑に来て」と、会場の笑いを誘った。

この国のことを語る上で、30 年前に起きた大虐殺の歴史があることを避けては通れない。ルワンダはフツ、ツチ、トゥワという 3 つの民族からなる国だが、ベルギーによる侵攻・占領を受け、植民地政策によりそれぞれの民族に分断・統治され、ついに 1994 年 4 月に民族対立による大虐殺が始まり、100 日間の犠牲者は約 100 万人。それは女・子供、赤ん坊まで含む容赦のない殺戮で、その時に手足の切断という残虐な行為も行われたという。そうした紛争の遺物による地雷で両足切断の若者が彼らの患者の第 1 号となった。

真美氏は 26 歳のとき、OL を辞めてスワヒリ語を学びに行った先のケニア・ナイロビでガテラ氏と知り合った。ガテラ氏は子供の頃の医療ミスが原因で足が不自由になったが、来日時、義肢製作所の存在を知り、真美氏にこの技術を学ぶように伝え、真美氏は 5 年の歳月を

かけて資格を取得、1997 年、ルワンダの首都キガリ (Kigali) にガテラ氏とともに義足製作所を開いた。

真美氏とガテラ氏夫妻は、障害を負った人たちを支援するための活動を立ち上げ、3 つの目標を掲げた。それは、①義足を提供し、自らの足で立ち上がってもらうこと、②仕事につながる技術を学



(写真左から反時計回りに) 最初の義足製作所(右)と隣接するレストラン、ゲストハウス。土地の低さから 5 回もの洪水災害にあい、政府の強制撤去で壊された建物(左下)。その後、別の土地に新たに建てた施設(下中央)。製作所で患者の義足の調整を行っているところ。(写真右)



んで自立してもらうこと、③障害のある人にスポーツを提供すること。現在に至るまでに無償で提供してきた義肢・装具・杖などは延べ8,000人分。日本には神奈川県に技能習得のための無償支援の制度があり、それを利用して、すでに10人のルワンダ人が技術を学び、義足づくりに携わっているという。

夫妻はまた、足に障害があってもスポーツを楽しめることを教え、スポーツを通じて自分に自信を取り戻してもらうことを目指して、パラリンピックにルワンダ共和国の選手を送り込んできた。さらには、ものづくりの能力を競うアビリンピックへ義足づくりの技能で選手派遣するなど実績を積んできた。必要とあれば、パラリンピック委員会に直訴して、選手派遣費用などの援助を取り付けたことも。行く手を常に困難に阻まれながらも、それを乗り越え、前向きに進む努力を惜しまない年月だった。

前頁の写真で見るとモダンな造りの最初の義足製作所は、5回もの洪水災害で建物は壊滅状態、器具も診療録も流されたりしたが、その都度、ルワンダの人々とともに立ち直ってきた。これからは、コロナ禍で中断していた地方への巡回診療も再開したい。そんな真美さんガテラさん夫妻の活動には、まだまだ多くの支援が必要とされている。活動の詳細は右下のQRコードで。暑い日本を、夫妻は8月25日、ルワンダに向けて出国した。（以上は、夫妻のお話から編集部が構成しました）



写真中央が真美さん、左にガテラ氏。

【活動の概要、ボランティアをしてみたい方】

ムリンディ/ジャパン・
ワンラブ・プロジェクト
info@onelove-project.info
http://www.love-project.info/



【ご支援先（一部紹介）】

- ゆうちょ銀行 ○二九（ゼロニキュウ）店
当座 0066497
ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト
- 郵便局からの振り込み（振込用紙は郵便局にあります）
00210-5-66497
ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

講演を聞き終えて…『ガテラさんとの出会い』

「……私の名前(洗礼名)はマリア・ルシア。ルシアはルーシ(光)、光のルシアなの」「えっ！あなたは僕のお母さんだよ！僕の名前はインマヌエルなんだ！」。

ガテラさんは私の手を取り、「あなたは僕のお母さんだよ！」と強く握りしめながら何度も繰り返した。喜びに溢れる彼の姿に、私は深く心が動かされた。その後もずっと“見つけた母親”の手を握りながら語ってくれたが、映画「ホテル・ルワンダ」の話になると彼の表情は曇り、悲しげになる。ガテラさんとの不思議な出会いは、互いの霊名や出会いのタイミングなどの偶然が重なったようにも見えるけれど、それだけでは人の心は動かない。心の奥深くの切望や祈り、想いが昇華し、エネルギーとなって初めて起こる必然の出会いだと思う。無邪気で新鮮な感動を持つガテラさん。彼のお母さんは、どんな人だったのだろうか。

講演後、ガテラさんと「ホテル・ルワンダ」について話した。彼の国では受け入れ難い内容かも知れないが、この映画が多くの人の関心をルワンダに向けたことなどを伝えた。「映画には事実も含まれているけれど、ヒーローとされた実在の人物は汚職で富を築いたアンチヒーローだ。さらに利益を得るために、ヒーロー物語に仕立てあげた映画なんだ。植民地化が引き起こしたルワンダの悲劇の真実を、確かな情報ソースを人々に伝えたい」と無念そうに彼は語ってくれた。

自ら立って歩くことの喜びと幸せ。ガテラさんと真美さんの、お二人の深い愛が織りなすママ・アフリカの大地の詩が、人々の心の裡で育まれ、太古の始めから吹いていた風に乗って、果てしなく響き続けていきますように。

マリア ルシア ピニエイロ今野由美

私の好きな聖書のことば

幼きイエズスのテレジア 梅田 知子

「重荷を負って苦労している者はみんな、私のもとに来なさい。
休ませてあげよう。」（マタイによる福音書 11：28）



この言葉が私の最も好きな聖書の一節です。
私は小学校四年生の時に母を病院のミスで亡くしました。当時、私の下に妹もいて、父の、「病院に行ってくるから、おばあちゃんの言うことを聞いて待っていなさい」という声は今も耳に焼き付いています。

元気な母を最後に見た姿を生きる力として今日まで過ごせたのは、父がカトリック系の学校にいらしてくれのおかげと思っています。後添えをもらった父の足手まといにならさように、妹を守って生きていくため、姉としての私は泣くことも忘れた日々でした。今思えばそんな私を支えたのは聖書との出会いだったと思います。目には見えない神の愛が注がれてきたと感じています。

父が亡くなった時は、学校の友人たちがカトリック教会で追悼のミサをあげてくれました。カトリック信者になりましたのも、主人が素晴らしい追悼ミサに感銘を受け「教会の勉強会に行く」と言い出したことによります。

悲しいことや、苦しいこと、寂しいことがあっても、この聖書の一節を思い出し、いつも神様が寄り添って下さると思ひ、これからも感謝とともに生きていこうと思っています。

社会活動部主催 学習会のお知らせ

テーマ: 見る時、看とられる時 — 介護の現場の体験より —

講師: 山内 保憲神父(上智学院カトリック・イエズス会センター)

日時: 9月22日(日)11時15分 イグナチオホール 参加費無料

- ・ 介護をする時、される時、看取りをする時、される時、どんなことが求められているのでしょうか？ 山内神父さまと共に考えてまいりましょう。

社会活動部 今月の予定

9月4日(水)10時 手芸の集い 第1、第2会議室

9月6日(金)10時ミサ後 社会活動部連絡会 第4会議室

9月14日(土)10時半 炊き出し 小野浜グラウンド(中央区小野浜町3)

一緒に車で行かれる方は、六甲教会に10時集合。

事前にその旨を事務所に連絡して下さい

9月20日(金)9時半 ともしび会 教会台所

(児童養護施設の子どもたちへのケーキ作り)

ケーキ作りに興味あるかたはぜひご参加下さい。

申込不要です。(写真は7月のケーキ)



『高みをめざして～六甲精神の源を探る～』（本編と補遺）の紹介

編著者 古泉 肇

皆さんは六甲学院初代校長武宮隼人神父のことをご存じでしょうか。帰天されるまでの40年以上の間、六甲学院と六甲教会の修道共同体に所属していましたが、教会の司牧には直接携わっておらず、信徒の方と関わることはあまり無かったようです。そして武宮神父が帰天して40年以上が経ち、生前の神父を直接知っている人も少なくなっています。



武宮神父と言えば、六甲学院校長時代のスパルタ教育と朝礼の長い話しか思い出さない、という人がほとんどかもしれません。しかし、私が調べるうちに、武宮神父は学校教育以外に、霊的指導者として全国へ深い影響をもたらしておられたことを知りました。

来年が武宮神父生誕125年の記念イヤーであることから、武宮神父の霊性と人物像を皆様を知ってもらいたく、私は武宮神父を直接知る人の証言を基に、言行録のスタイルで本にまとめました。

そして武宮神父の言葉と行いを通じて「武宮精神」とは何かを探求しました。

武宮神父はこの世から旅立たれましたが、武宮精神は六甲精神という形で六甲学院に受け継がれています。そういう意味で、私は本編に六甲学院の現在の姿も描きました。

六甲学院を超えて、日本全国に響いた武宮神父の霊性が、今も生き続け、私たちが次の世代に伝えることができれば幸いです。

「すべてのものは過ぎさり / そして消えて行く /

そのすぎ去り消えさって / 行くものの奥に在る /

永遠なるもののことを / 静かに考えよう 武宮隼人」（ / は本人が改行した位置）

（教会図書室でご覧になれます。A5判/248頁）

壮年会・婦人会主催 教会遠足

恒例の教会遠足を行います。皆様と楽しいひと時を過ごしたいと存じます。統合された大阪高松教区の仲間を訪ねて、徳島教会を訪ねます。

- ・日 時 2024年10月19日（土曜日）集合8時30分
- ・行 程 六甲カトリック教会 8:30 出発 === 徳島教会でのミサ・交流 ===
=== 昼食（ホテルサンシャイン徳島） === 徳島阿波踊り会館 ===
=== 大人の社会科見学（ハレルヤスイーツキッチン工場見学） ===
=== 六甲カトリック教会 18:00 解散（予定）
- ・参加費 10,000円（六甲教会信徒） / 12,500円（六甲教会信徒以外）

カトリック教会は、毎月、「教皇の祈りの意向」を示し、教会全体が日々の祈りの中で、その意向に基づいて祈るように招いています。9月の祈りの意向は、「地球の叫び」です。次のように祈りましょう。

「私たち一人ひとりが、地球の叫びに、また、環境災害や気候変動の犠牲者の叫びに心の耳を傾け、私たちの住む世界を大切に作る生き方へと導かれますように。」

【2024年9月行事予定表】

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
年間第22主日 すべてのいのちを守るための月間被造物を大切に する世界祈願日 ◎日曜班					初金曜日ミサ 7:00 10:00 社会活動部 連絡会 10:00 ミサ後	
8	9	10	11	12	13	14
年間第23主日 小教区評議会 11:30		日本 205 福者殉教者			◎灘北1・ 北・三田	十字架称賛 教会学校始業式
15	16	17	18	19	20	21
年間第24主日 祖父母と高齢者のための世界祈願日 地区役員会 11:30	三日月会 例会 敬老の集い				◎灘北2・阪神	聖マタイ使徒 福音記者
22	23	24	25	26	27	28
年間第25主日 社会活動部学習会 11:15 祈りと音楽の集い 14:00	教会事務 休み 青年会 キャンプ (~26日)				◎定期清掃	聖トマス西と 15殉教者
29	30					
年間第26主日 世界難民移住 移動者の日						

◎印は掃除当番地区（午前7時時点で気象警報が発表された場合は中止）

【編集後記】

◇8月11日の“平和を祈る集い”でのルダシングワ夫妻の講演は、約2時間半に及ぶものでした。出席者は40名ほどでしたが、講演が終わっても、熱心な聴衆からの質問は絶えず、10名が次々にマイクを握りました。答えたのは夫君のガテラ氏で、通訳は真美夫人。生のスワヒリ語を耳にしたのは初めてでした。寄付だけでなく、自分たちもレストランやゲストハウスの運営で収入を得て、義足提供のための活動費を賄ってきたとする夫妻の苦労に対して、私たちもエールを送りたいと思います。（N.O.）

(ver1.3)

<p>・次回10月号の発行は9月28日（土）です。原稿は毎月15日ごろまでに、教会受付へご持参いただくか、FAX、メールでお願いします。 (renraku@rokko-catholic.jp) 皆さまからのご寄稿をお待ちしています。 ・教会SNSチームは、フェイスブック、インスタグラム、X（旧ツイッター）、YouTubeチャンネルで配信しています。「六甲カトリック教会」で検索してみてください。</p>	<p>六甲カトリック教会</p> <p>〒657-0061 神戸市灘区赤松町3-1-21 電話 078-851-2846 FAX 078-851-9023 http://www.rokko-catholic.jp 発行責任者 英 隆一朗 編集 広報部</p>
---	---